

## 環境行動に関する包括的モデルについて

富士原 光 洋

### Comprehensive Models of Environmental Behavior.

Koyo FUJIHARA

#### 1. はじめに

本論文では、環境心理学における最近の環境行動に関する包括的モデルを取り上げ、モデル構築研究の動向を分析する。

環境心理学は、物理的環境と人との相互作用を解明する分野である (Gärling 1998)。特に1960年代以降、社会的に環境破壊や都市化の問題が注目されようになり、物理的環境と人間との関係究明に関心が高まり、環境心理学でも多くの研究が行われるようになった。こうした中1970年代前後には、特定の時間・場所での物理的環境と行動様式を体系化した Barker の behavioral-settings 理論 (1968, 1987)、Sommer の個人空間の研究 (1966)、Ittelson ら (1974) の人間と社会・物理環境との関わりを追求する環境心理学の主張など、後の研究に大きな影響を与えることになった研究パラダイムや方法論が出された。そして環境心理学は、研究対象の広がりと共に伴う関連諸科学との学際的化といった傾向を示しつつ発展した。この間の経過について Stokols (1995) は、1960年代後半以降の研究動向として、

- 1) 人と環境との相互交換の新たな概念化。
  - 2) 研究方法・知見のコミュニティー問題に対する分析・解決への応用。
  - 3) 人と環境、あるいは集団と環境との相互交換的分析の強調。
  - 4) 環境心理学の国際的広がり。
- といった特徴をあげている。

さて、上記 Stokols があげた研究動向の第1の特徴(人と環境との相互交換の新たな概念化)

は、物理的環境と人との相互関係を表すモデル構築として、その新たな展開が伺える。このモデル構築の最近の特徴の一つとして、各種環境下における人の行動モデルの構築が盛んとなったことがあげられよう。これは、1980年代以降、環境心理学が物理的環境が有する人的影響を分析するだけでなく、人から環境への働きかけ(行動)により焦点を当てるべきだとする主張を背景としている。そして、研究対象の細分化が進み、各種特定条件下のモデルが提案される一方、環境全般に広く応用できる一般性を持った包括的モデルの必要性も強く主張されている。

ここにおいて、環境下の行動に影響する人的要因を環境に対する態度という概念でまとめ、環境行動への影響を表したモデルとして、次に示す Grob の環境行動モデルが提案されている。このモデルは、ある環境下での行動発現に重要な位置を占めるのは、客観的な物理的特性としての環境ではなく、個人が知覚している環境であり、個人の環境に対する姿勢・態度であるという発想に基づいている。

#### 2. Grob の環境行動モデル

Grob (1995) は、環境に対する人間の働きかけを環境行動(環境に影響する直接的行動)として広く包括的に扱い、この環境行動へ影響する人的要因を環境への態度としてまとめ、両者の関係をモデル化している。このモデルの理論的根拠は、個人の態度と行動との対応関係を究明した研究におかれている。

まずモデルでは、環境行動への影響が従来よ

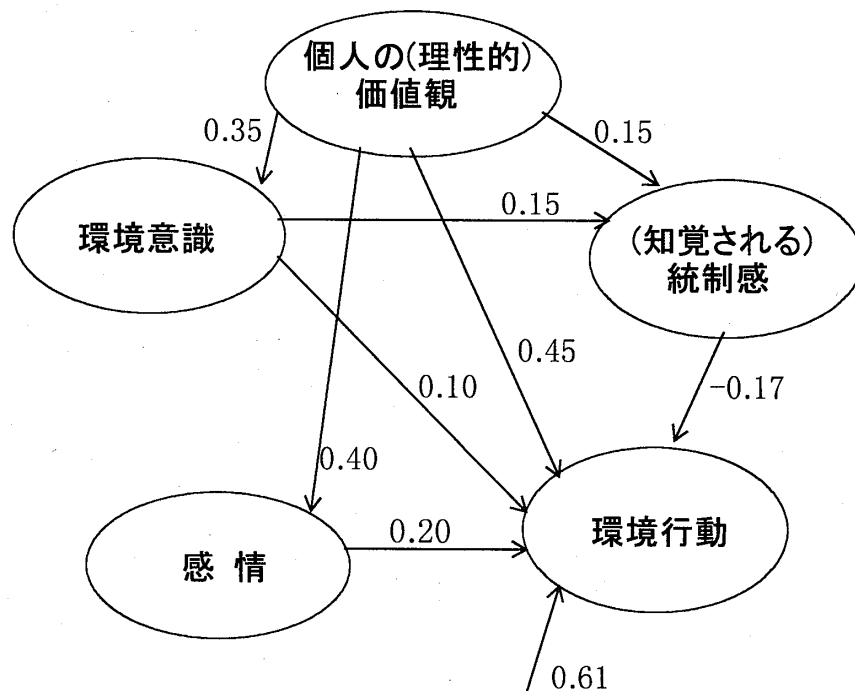


図1 Grobの環境行動の経験的モデル  
(数値は $\beta$ 係数を表す) Grob, 1995 より 筆者一部修正

り検討されてきた「環境意識」、「感情」、「(知覚される)統制感」、「個人の(理性的)価値観」の4要因を、環境行動を説明する要因として取りあげている。さらに4要因はそれぞれ下位要素からなり、環境意識が「環境に関する実際の知識」と「環境問題認知」から、感情が「人が実際におかれている環境の感情的価値」と「個人の理想と現実環境の食い違いから生じる不安」とから、(知覚される)統制感が「科学・技術の効力への信頼」と「自己効力の信頼」から、そして個人の(理性的)価値観が「脱物質主義への信念」と「新しい姿勢への準備状態(開放的・創造的思考)」から、それぞれ構成されている。Grobは、以上の仮定のもと、4要因が専門的見地から認められる環境的行動にいかに関与するかを分析することを目的とし、個人の4要因特性の強さと環境行動とを質問紙法により測定し、各特性項目得点と環境行動得点の相関関係を分析し、その関係を求めている。図1に結果を示すが、環境行動に最も影響を及ぼすのは、「個人の理性的価値」であり、「感情」がこれに続き、「環境意識」は相対的に低い影響力であることが示されている。なお取りあげられた4要因をあわせた影響の程度は、環境行動全体の

39%であった(環境行動の全分散の39%の説明率であった。)と報告されている。

Grob (1995) 自身も認めるとおり、態度の要因からモデルが環境行動について説明できる割合は、4割程度と相対的に低率である。ほかにも物理的環境要因(地理的状況等)、社会的要因、さらに地域の習慣など文化的要因も当然のことながら環境行動には影響を与えられ考える。また、方法論的に質問紙法による個人の自己評価分析でのみモデルが構成されている点など検討すべき余地が残される。しかし、環境に対する人的要因を個人の環境に対する態度という枠組みで包括的にとらえ、環境行動の影響を説明しようとしたことは、評価されるであろう。

次に環境と行動を総合的にとらえる枠組みを新たに提案したモデルについて述べる。

### 3. Clisthroe らのコンテストモデル

Clisthroe ら (1998) は、環境とそこで生じる人の行動との関係(相互作用)をコンテスト(context)という概念を用いて、より包括的に説明しようと試みている。このモデルの特徴は、環境下での人の行動を説明するモデルであるとともに、モデルに時間軸を組み込み、人を含め

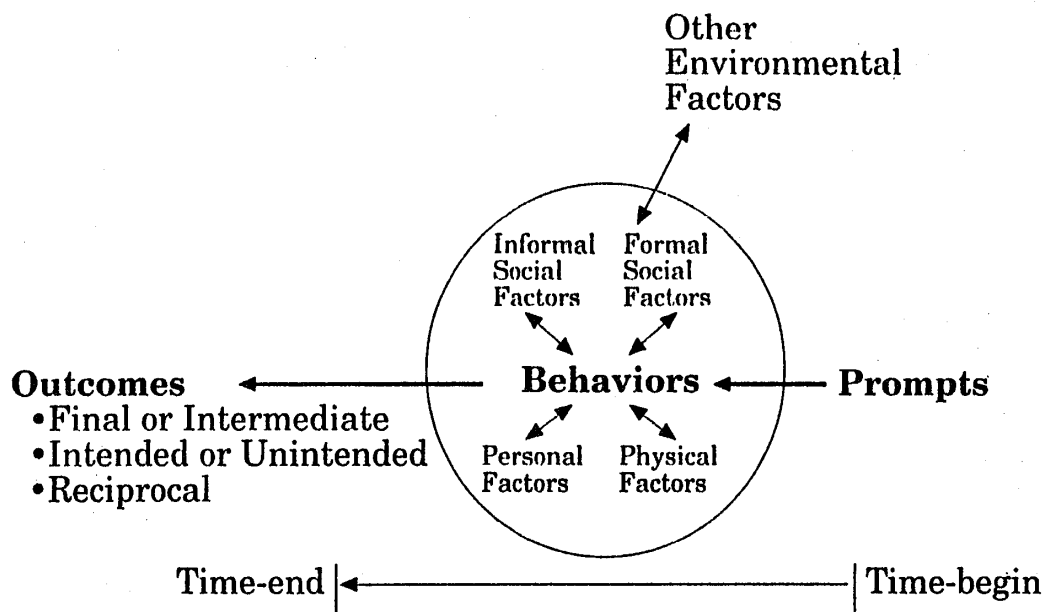


図2 コンテキストの概略

Clitheroe Jr, H. C. ら、1998 より

た環境全体が、行動の移り変わりとともにどのように変化していくかを説明している点である。

まず、このモデルにおいて主要な概念となるコンテキストとは、対象となる特定環境（または状況）における諸特性間の相互依存関係と定義されている。そして想定される環境（または状況）での人的、物理的、社会的諸特性とその関係性はすべてコンテキストに含まれ、コンテキスト要因変数として、互いに影響を与えながらそのコンテキストで生じる行動を決定しているとされている。図2にコンテキストの概略を示すが、まず最初にコンテキストの出発点であるプロンプト (prompts) が存在する。プロンプトは意図的、無意図的な心理過程と行動過程の出発点とされ、コンテキストの社会的物理的特性や、コンテキストに存在する個人の特性などから生じるとされている。そして行動過程 (behaviors) は、時間の経過に従い、人的要因 (personal factors)、物理的環境要因 (physical factors)、公式、非公式な社会的要因 (informal social factors) (formal social factors) に影響を受けながら、目的とする方向に進み、結果 (outcomes) に至る。なお行動過程の結果の属性としては、結果が初期のプロンプトから生じた行動目標を達成したか、中途段階か、また意

図されたものか否か、といった属性が考えられている。

Clitheroe ら (1998) は、以上のコンテキストモデルを、顧客サービス例に当てはめその有効性を主張している。

コンテキストモデルは、1つの現象を表すモデルというより、むしろ現象への接近方法であり、環境と行動の関係を解明するための新たな分析方法の提案である。想定されるコンテキスト要因変数の多さや選択の妥当性に注意が必要であろう。しかしながら、その説明変数は過去の研究を網羅する包括的なものである。さらに、環境行動のモデルに、時間軸を設定して、動的現象をモデル化した試みは画期的である。

以上、grob の環境行動モデル、Clitheroe らのコンテストモデルをみてきたが、両者に共通する点として、

- 1) 人間の行動に焦点をあて、その基礎となる認知過程、感情過程に説明原理を求めている。
- 2) 行動に影響する要因について、過去の心理学的研究での経験的データ・知見を可能な限り含めている。
- 3) 包括的モデルであり、特定環境下の行動予測に应用する際には、状況に応じた説明変

数の選択が必要である。  
があげられるであろう。

現代の環境は、急速に変化し、多様化・複雑化している。こうした中で、本論文で紹介した環境心理学における包括的モデルの提案は、環境とそこで生活する人との関係を分析していく環境心理学の、新たなパラダイムづくりといえる。

#### 引用文献

Barker, R. G. (1968). *Ecological Psychology: Concepts and Methods for Studying the Environment of Human Behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press.

Barker, R. G. (1987). Prospecting in environmental psychology: Oskaloosa revisited. In D. Stokols & I. Altman (Eds), *Handbook of Environmental Psychology* (Vol. 2, pp. 1413-1432). New York: Wiley.

Clitheroe, H. C., Stokols, D. & Zmuidzinas, M. (1998). Conceptualizing the context of environment and behavior. *Journal of Environmental Psychology* 18, 103-112.

Gärling, T. (1998) Introduction-Conceptualizations of human environment. *Journal of Environmental Psychology*, 18, 69-73.

Grob, A. (1995) A structural model of environmental attitudes and behaviour. *Journal of Environmental Psychology* 15, 209-220.

Ittelson, W. H., Proshansky, H. H., Rivlin, L. G., & Winkle, G. (1974) *An introduction to environmental Psychology*: New York: Holt, Rinehart & Winston.

Sommer, R. (1969) *Personal space. : The behavioral basis of design*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Stokols, D. (1995). The paradox of environmental psychology. *American Psychologist*, 50, 821-837.